

在宅介護、逃げ場なし、この現場を担う家族から過酷な状況について、訪問看護や訪問診療、サビダスの充実を求め声が出へられ注目を集めました。

私の妻は「くも膜下出血」により手術を行い寝たきり、言語障害、のどは水を咽ける気管切開、栄養をチューブで注入する胃ろう、24時間痰の吸引、常時サンソ吸入、妻の介護歴十年介護度(5)、重度障害としてのサービスを介護事業所から受けております。

日常の介護の中で私を解放してくれる時間は、訪問看護サービス一時間、唯一の自由時間であって、あとは家を離れることはできません。

こんな状況の中で昨年四月、私にとって救世主の存在になったのは、訪問看護ステーション四国中央さんに看護をお願いしたことです。祝祭日、土、特に金正月、五月連休は決してシヨートで入院しておりましたが、こ

れが大巾に改善され安心して休息する事が  
できるようになりました。

なかでも、民間大手病院で二年間も治療し  
治ゆしなかつたのどの出血を県立病院で人脈  
を通じて窮状を訴え、家族は不治とまで思っ  
ていた出血が専門医師により見事に止血し、  
治ゆするに至り恐怖から解放されました。

夜間の緊急対応はすばやく、処置判断は的確、主治医との連絡、連携を密にし、いっし事なきに至っている。

訪者四国中央さんの陣容は、県立病院の出身集団で厳しい現場<sup>ごさ</sup>、ひとの命を預る天使として、実践経験が実に豊富、接遇万点人からは立派、とりわけ患者にやさしく、決して押しつけなどなく、納得のいく説明をし  
てくれる。これは三島看護専門学校で皆さん  
は教べんをこつていたことで証明されます。

又、組織的関連の有戸田医療基は、日常使  
用のタン吸机器の販売、修理公的助成のアド

バイス紅生医療品も取扱われ利便このうえも  
ありません。

四国中央さんは、数ある訪者ステーション  
で異色の存在として、ますます発展し行き場  
を失う患者、その家族に希望の灯をかざし燃  
やしつつけてほしいと念願いたします。

二〇一四年七月三十一日

四国中央市寒川町 森下礼二 86歳

患者(妻) 86歳